

足助病院ブランディングプロジェクト ～へき地医療拠点病院の想いと矜持～

愛知県厚生農業協同組合連合会 足助病院 院長 小林真哉

これから幾人の“人々の心を波立てること”ができるのだろうか？

共奏する院長として非日常の医療から日常の医療・福祉・介護のシームレスな“想う医療”を届ける使命感と人々の心のひだに寄り添い、足助病院を「記憶のインデックスに残す」という想いと矜持に基づくブランディングプロジェクトをご紹介します。

コロナ禍の襲来など夢想だにしていなかった2019年の秋、厚生労働省から全国1,652の公立・公的病院の中で診療実績が少なく非効率な医療を招いていると分析された424の病院が「再編統合について特に議論が必要」として病院名を公表されました。足助病院はその中には含まれてはいませんでしたが、くしくも2019年4月に病院長に就任したばかりの新米院長の筆者にとっては「地域医療構想」をより深く考える端緒となった事案でした。

立地条件や社会的インフラ等のデメリットをいかに克服して、「その地にあり続け、地域に適合した医療・介護・福祉のサービスを提供する」ために日夜精進し続けることがわれわれリーダーには求められています。その過程で、地域住民に対する適切な情報開示・提供のみならず、地域住民・当院職員が「誇りを持って語ることができるアイテムに病院がなること」は組織の健康経営にとっても大切なことです。その「まだ足助病院を知らない方々に知っていただきたい」という熱い想いが“足助病院ブランディングプロジェクト”の源流です。本稿では、その想いに至ったプロセスとともに、過去・現在の取り組みそして未来への展望をご紹介します、お読みになられた方々に“へき地医療拠点病院の想いと矜持”を知っていただければと思います。

足助病院を取り巻く環境の認識と 地域への想い

当院は1950年に現在の愛知県豊田市の旧足助町岩神の地に創設された、三河中山間地域のへき地拠点病院です（図表1）。周りには中山間の山林・田畑等が広がり、農業・

病院概要

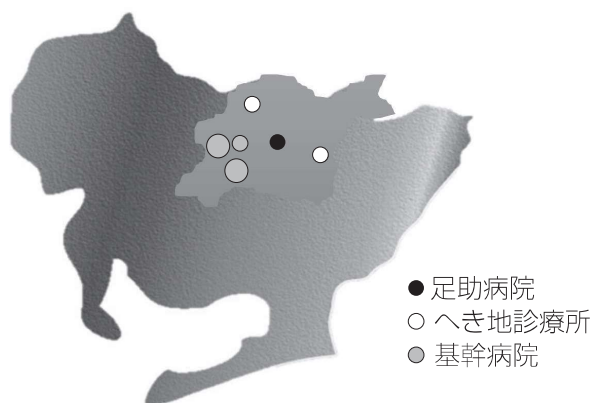
名称	愛知県厚生農業協同組合連合会 足助病院
所在地	愛知県豊田市岩神町仲田20番地
電話	0565-62-1211
病床数	148床（うち、一般100床、地域包括48床）
H P	https://asukehp.or.jp

林業等で第一次産業にいそしむ方々が多く、健康寿命の長い自立高齢者が多くいます。

また、全国有数の紅葉の名所として「香嵐溪」や江戸時代後期から明治末の町並みが保存されており、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。豊かな自然を活用した観光施設も多数あり、春夏秋冬、街はにぎわいます。しかしながら、医療圏の高齢化率は40%を超えます。

私は、2019年4月から第9代の足助病院長を拝命し、①終の住処を継続するための医療、②自助・共助・公助し思い寄り添う医療、③共に集い近助する福祉・介護、の

図表1 足助病院の概要



【足助病院 沿革】

- 昭和 25 年 開設
(病床数 24 床、職員 18 人、医師 7 人)
- 平成 15 年 へき地医療拠点病院指定
(中核病院より移行)
- 平成 27 年 地域包括ケア病床：40 床へ転換
- 平成 30 年 介護医療院開設
(療養型病床より転換)
- 平成 30 年 病床再編
一般 100 床・地域包括 48 床・
介護医療院 42 床で現在に至る

3つを新理念に掲げました。そこから、「終の住処の実現」、「教育の場の提供」、「地域防災活動」に軸足をおいた医療・福祉・介護のシームレスな“想う医療サービス”を届ける病院運営を遂行しています。

足助病院創立100周年を迎える2050年ごろを見据えて、当院を医療資源として存続し、日本全体が迎える超高齢化社会における医療のあり方の一つを示すべく『日本の将来像を見据え、未来の医療の形を模索するのだ』という気概を持ち運営しています。

“共想”する 足助病院ブランディングプロジェクト

「“想う医療”を届けるわれわれの存在を知ってもらいたい」という強い想いに支えられているプロジェクトの「起源はいつか」

と問われれば、約20年前、筆者が大学病院時代に足助病院へ赴任を打診され、快諾したことに回帰します。この20年間は自らを成長させるだけでなく、足助病院や地域への想いを育む大切な期間となりました。

2013年10月には巴川のほとりに4階建ての医療・介護・福祉の砦となる新病院が完成し、これは、われわれにとって大きなターニングポイントとなりました。病院の新設にあたってデザインにも力を入れ、日の出前や日没後の薄明かりのような何色とも言えない美しいグラデーションかつ、空の色で極めて黒に近い赤紫色である至極色をまとった特徴的な病院外壁としました。また、早川名誉院長の理念をもとに生み出したロゴやデザイン、内装は、10年の年月を経た現在も足助病院ブランドのハード面のアイ

図表2 足助病院ブランディングプロジェクトの軌跡



コンとして確固たる地位を確立しています (図表2)。

“共創”する 足助病院ブランディングプロジェクト

病院ホームページの充実を皮切りに、今ではSNSからYoutube、各種予約システム導入へとブランディングの場は順調に進化を遂げてきました。院内外での展示物・配布物は、手に取りやすさ、読みやすさを意識して制作を重ね、より洗練され続けています。なかでも、筆者が院長就任以来から続けている、Web連載コラム「結の扉」は、院長就任以来の毎日更新を経てその数は1,200編を超えました。

この、「結の扉」は、病院長を務める筆者

だけでなく、院内の医療従事者や地域住民の方々からのコラムも掲載しており、情報発信だけでなく地域住民とのコミュニケーションツールともなっています。

また、HP内に設置している動画特集ページ「あすけびょういんチャンネル」では、患者さまの役に立つような医療や病院に関するトピックだけでなく、筆者の「気象予報士」資格を生かした天気と健康に関する動画なども載せており、「わかり易く、勉強になる」と好評いただいています。

現在では、当院で発行するものに収まらず、医療系雑誌や一般向けの人気雑誌、TVでの特集といったメディアへの露出も積極的に行っています。その他にも、映画撮影協力や、地元の民間企業との共同事業の一

図表3 共に想う

夕暮れの足助病院に架かる
幸福を呼ぶ二重虹



地域の命を守る訪問車両



人々が集う紅葉の香嵐渓



病院長が背負う想い



だ！」と言ったように、各職員の言い尽くせない“想い”が、“真剣勝負の魂”がインタビューに込められています。

また、足助病院がTVで特集された際には、職員や病院風景、業務場面が撮影され、足助病院の雰囲気や醸し出される素敵な番組となりました。

最近では、2023年

環で行った防災ドローンの災害時医療への活用実験を行って注目され、全国紙に取り上げていただくなど、さまざまな事業ともかわりをもち、取材対象も「個」から「組織」全体へ広がってきています。

例えば、医療系雑誌において取材依頼を受けた際は、足助病院スペシャルレポート『JA愛知厚生連足助病院の取り組み—超高齢社会における地域と医療機関の共生の在り方を考える、住民との親密な関係構築や持続可能な社会づくりへの貢献』を完成させるべく、各職域の職員にインタビュー協力を要請しました。

完成した原稿は、そこに綴られた16,000字の数倍のボリュームで、職員の足助病院・地域へ対する“想い”があふれており、人々の心に深く沁み込んだものと思います。そうして出来上がったこのスペシャルレポートを読んだ若手事務職員が「これぞ足助病院

12月に全国公開された映画『光る校庭』にて、足助病院はロケ地として、私自身は医療監修として銀幕デビューを果たしました。豊田市の美しい風景と荘厳に佇む足助病院を舞台に、「病気」、「死」という重いテーマを取り上げながらも、主人公たちの会話から滲み出る友情、信頼、愛情が見事に描かれた作品となっています。

また、地域や民間企業との取り組みでは、豊田市において、次世代航空モビリティ分野の振興を図るために2021年に発足した「豊田市次世代航空モビリティ協業ネットワーク」にて豊田市と民間企業と共同し、物流ドローンの構想に参画しました。

われわれの得意分野でもある災害支援を視野に入れ、物流ドローン「SkyLift」で医療・介護用品・食料品を空輸する実証実験を行い、その様子は各種メディアでも取り上げられました。(図表3、4、5)

図表4 共に創る

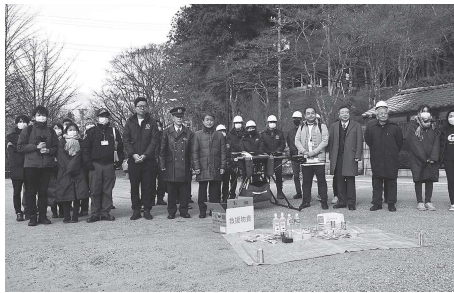
TV収録風景



映画撮影風景：院内・院外



物流ドローン「Sky Lift」救急実証訓練



2023 足助病院祭



図表5 共に奏でる

多職種連携のシンボル 新緑の飯盛山



院内コンサート
足助高校生と共に



異業職種連携講演会



地域コンサート



“共奏”する 足助病院ブランディングプロジェクト

1. 足助医学舎との共奏

当院は「教育」を非常に大事にしています。職員教育に力を入れているだけでなく、

地域住民の方への医療・福祉・防災啓発活動や、地域の小学校、中学校、高校での出前授業など「学びの場」を多種多様に展開しています。

特に医学教育の分野では、2005年から年間70人を超える初期研修医を受け入れており、その数は累計すると800人近くにもなります。

現在では医学部生だけでなく、看護や薬学、リハビリ、栄養管理、福祉、医療事務など、医療にかかわるさまざまな医療系学生を対象に、「足助医学舎」を夏休み期間に実施しています。

教育プログラムの一環として、これまでベテラン医師への同行を行ってしま

したが、近年では「患者のシャドーイング」や「訪問看護への同行」、「福祉施設への訪問」なども取り入れ、現場の声を聴いています。

また、現場の声を聴く、「聴心する足助想診」というキャッチコピーは、医療・福祉・

図表6 足助病院リーフレット 三種の神器

医療・福祉・介護のシームレスな“想う医療”を“降り注ぐ想い”で届ける我々の存在の提示する至極なリーフレット

「聴心する足助想診」は、われわれの目指す“想う医療”であり、医療・福祉・介護の本質探究のキャッチコピー

筆者（医師・気象予報士・防災士）と職員（防災士）を中心に活動し、地域の医療・介護・福祉の拠点・防災の拠点となることを目指す啓発リーフレット



介護の本質探究そのものであり、われわれの目指す「想う医療」を体現しています（図表6）。

2. ASUKE-気防健研究会との共奏

筆者は医師免許の他に「気象予報士」と「防災士」の3つのライセンスを有しています。それらを生かし、地域の病院として貢献できることを考え、足助で気象と防災と健康を複合的に考える会「ASUKE—気防健研究会」（以下、健研究会）を立ち上げました。

健研究会は15人を超える当職員の防災士資格保持者を核に、「防災啓発活動の立案」や「災害弱者の備蓄食研究」、「トイレ問題」などさまざまな課題解決のために活動しており、足助病院が地域の防災の拠点になることを目指しています。

3. 病院職員向けスローガンの策定

当院では、毎年年初に「病院職員向けスローガン」を発表し、その年の病院の大き

な方向性を示しています。

- | | |
|-------|----------------------------------------------|
| 令和元年 | 『降り注ぐ想いで
人々の心を波立たせたい』 |
| 令和二年度 | 『共想し共創する』 |
| 令和三年度 | 『自他を想う』 |
| 令和四年度 | 『らしくあらん』 |
| 令和五年度 | 『雲外に蒼天あり』 |
| 令和六年度 | 『温かい言葉』
～あらゆる病を癒す音楽～
(人材が育ち、人財として磨かれる) |

何事も結果は大切ですが、プロセスにおける努力はそれ以上に大切です。そして、たゆまぬ努力を経て達成した結果を十二分に利用し尽くすことが次なるステップの足掛かりとなります。

スローガンに向けたプロジェクトの一つひとつの過程において、職員の自信、自覚が醸成され、質も高まっています。それ

らはコミュニケーションツールとなり、地域住民の満足度を高めています。

組織の経営の礎は「人」です。病院組織を磨き、知ってもらうことはリクルート活動にも確実に成果をもたらします。足助病院に地域医療研修で多くの初期研修医が訪れることや、若手の専修医・総合内科医が勤務していることは一つの結果なのだと思います。

足助病院ブランディングプロジェクトの展望

2023年10月にNHKの番組「クローズアップ現代」で、山村地域の課題解決のために足助病院から電力会社を立ち上げた取り組みが全国的に取り上げられ、当院を多くの人に知ってもらう機会となりました。

また、2023年11月には最新のトレンドを発信し、若い世代を中心に人気を博している女性週刊誌『an.an』から筆者が依頼を受け、医学と気象学の両方から「免疫力をUPする温活」というテーマで取材を受けました。

このように、数々のメディア媒体で、病院の取り組みや職員が取り上げられることで、専門的領域である「医療・介護・福祉」だけでなく、普遍的領域「日常生活により近い題材」とのかかわりが生まれて話題となり、多くの方により近い、親しみやすい病院へと成長していきます。今後は、コロナ禍で叶うことの少なかった顔と顔の見える、より密で効果的な交流をさらに展開し

ていく予定です。

その一環として、地域の集会場や多職種の会合などで楽曲演奏を行う「音活」にも取り組み始めました。これまでも、病院のホールや介護施設で、交響楽団や地元の学生を招待したり、職員や筆者自らがサクスを演奏したりとミニコンサートを開いております。音活は、私および職員の卓話でも交流を深め、好評をいただいております。

院内外の多職種連携交流・異業種連携交流は個、組織の「風度」*を醸成させるために必要であり、大切です。「この組織なら」、「この人なら」という信頼の気持ちを持たせることが「組織と人の風度」をつくり上げていくのだと思います。情報、判断、決断、行動などの要素も組織づくりに不可欠ではありますが、それ以上に“風度”が必要です。

風度というのは、求心力、信頼感、行動力などが醸し出す「人としてのコク：風味」なのだと思います。アメリカの思想家ラルフ・ワルド・エマーソンが「あらゆる病を癒せる音楽、それは温かい言葉である」と述べたように、これからは「連携交流」、「風度醸成」のキーワードに「温かい言葉」をさらに強く意識していきたいと思います。

本稿をまとめることは、組織として、リーダーとしての風度醸成にあらためて想いを馳せる素敵な機会となりました。

最後に本誌の羅針盤の一つに加えていただいたことに心から感謝するとともに、皆さまの道標の一つになれることを祈念して筆を置かせていただきます。

*「風度」については、足助病院コラム『結の扉』院長コラム Vol.60をご参照ください。